

【完結】 衛宮切嗣 「僕は、メガガルーラを許さない」

yosida

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトル通り? (・?・?) ??

※マサラ人

※この作品ではメガガルーラがポケモン最強です。

# 目次

ぼうけんのはじまり	1
はじめてのジムバトル	7
チャンピオンリーグ	15

## ぼうけんのはじまり

1.

マサラタウン。それは人間による土地開発が進んでいる現代において、数少ない自然豊かで空気の澄んだ田舎の小さな町である。

そんな町に住む青年——衛宮切嗣はこの町の外れにある。ポケモン界の権威ことオーキド博士の研究所へと足を運んでいた。

「……ついに、この日が来たか」  
研究所にいる研究員たちと軽く挨拶を交わしながら、切嗣は一人呟く。

その言葉には「ようやくこの時が来た」といった風な万感の想いが込められており、切嗣がどれだけこの日を待ち望んでいたのかが伺える。

「来たよ、オーキド博士」

「おお。ようやく来たかキリツグ」

研究所の最奥の自動ドアが開き、切嗣はそこにいた老人と言葉を交わす。そしてこの老人こそ、オーキド博士その人だ。そして——

「ようやく来たか。衛宮切嗣」

「……言峰、綺礼」

あえてスルーしていた青年に名前を呼ばれ、苦々しい顔をしながら切嗣はそちらへと顔を向けた。

研究所の壁に背を預け、腕を組んで佇んでいる男、言峰綺礼。

所詮、切嗣のライバルといったところか。……切嗣としては、甚だ遺憾なことだろうが。

「これこれ、仲良くせんかいおまえたち。これからおまえたちは互いを高め合う関係——好敵手ライバルなのじゃぞ？」

「……」

「……好敵手、ねえ」

それはないだろう、と。切嗣は内心で顔を顰める。

切嗣は横目で綺礼を見る。相変わらず何を考えているのかわからない顔をしていて、それが非常に腹ただしく。切嗣は直ぐに視線をオーキド博士へと向けた。

綺礼は綺礼で切嗣と同じような行動を取っていたが……。そんな二人の様子を見て、オーキドは失笑しながら二人に三つのモンスターボールを見せる。

「ほれ、初心者用ポケモンじゃ。このなかからひとつ、自分の欲しいポケモンを選ぶが良い」

「……」

「……」

その言葉に対する返答は、無言。

切嗣が無言な理由は単純明快。綺礼のあとにポケモンを選ぶことにより、綺礼に対するアドバンテージを取るつもりだからである。

衛宮切嗣は言峰綺礼と相容れない。ゆえに何度も衝突し、その結果周りからは互いを競い合う好敵手ライバルに見えるのだ。

そんな曲がりなりにも衝突してきた相手である。切嗣は綺礼が旅の途中でポケモンバトルを仕掛けてくることなど手に取るようになる。かかる。

それも、おそろくこちらが疲弊した時に集中的にしかけてくるだろう。

序盤なら、ポケモンを育てている最中に、とか。

まあ切嗣は最初のポケモンで最後までいくつもりはないので、あまり意味のない行為だと言われれば意味のない行為ではあるのだが。

それでも、なんとなく、なんとなく優位にたっておきたかったのである。

もしかしたらいまここで、貰った瞬間にポケモンバトルを開始させられるかもしれないのだから。

だから、衛宮切嗣は動かない。

言峰綺礼がポケモンをその手に取るまで、動くつもりは毛頭なかった。

そして、言峰綺礼も動かない。

何も映さない瞳でジツ、と。ポケモンの入っているモンスタールを眺めていた。

そんな二人の様子を訝しみながら、オーキドは口を開いた。

「ほれ、どうしたんじや？　ポケモンを——」

「——わからない」

オーキドの言葉を遮るかのように、綺礼もまた口を開く。

その続きを促してか。オーキドは口を閉じ、綺礼の言葉の続きを待つ。

「わからないのです、博士。わたしは、一体なぜ、ポケモンを手にしなければならぬのかを」

「……は？」

「確かにわたしは、ここにポケモンを受け取りに来た。けどなぜ、わたしはポケモンを受け取りに来たのかがわからない」

「いや、あの」

「本当にポケモンを欲しいのか、いざその場に立つとわからなくなりました」

「えーっと、な？」

「ポケモンを欲しいなどと思ったことはない。だが、なぜかポケモンを受け取らなければならないと思いきり、今日わたしはここに来た」

そこから先は、切嗣はよく覚えていない。

ていうか始めから支離滅裂で意味不明な言葉の羅列だったために、切嗣は考えることを放棄していた。

オーキドの説得(?)により、綺礼がヒトカゲを手にしたことだけは確認したが。

そして切嗣は、心を殺し、感情を消し去りゼニガメの入ったモンスタールボールを手取る。・・・甚だ不本意なことである。

何が悲しくて、こんなどんくささそうなポケモンを手にしなければならないのだろうか。

切嗣個人的には、始めのポケモンはフシギダネがベストだった。

“ねむりごな”や、“やどりぎのたね”などの有用な技を習得出来るからだ。

実に、実に切嗣好みのポケモンであると言えたのだが：まあ、仕方あるまいと切嗣はゼニガメの入ったモンスターボールを手に取る。ここまで来るのに約一時間半、長丁場である。オーキドは漸くか、と息を吐き。

「カゲカゲ」

「……」

綺礼はなんの感情も見せない瞳でヒトカゲをジツ、と見つめ。

「……」

切嗣はポケットのなかにモンスターボールをしまい、足早に研究所を去ろうとする――

「待て、衛宮切嗣」

「……」

その言葉に、切嗣の足がピタリと止まる。

「せっかく博士にポケモンを貰ったのだ。少し、ポケモンバトルというものに興じてみないか？」

やはり来たか、と思いながら。切嗣は振り返る。

「いいだろう言峰綺礼。その申し出、引き受けよう」

「ほう？　まさか、貴様が応じてくれるとは思ってもみなかったぞ」

「やらないのかい？　なら僕は、帰らせてもらうが」

「随分とせっかちな衛宮切嗣。急いではことを仕損じるぞ」

「ほざけ」

二人の視線が飛び交う。先ほどまでなんの感情も宿してなかった綺礼の瞳に、切嗣への敵意という名の感情が籠る。

「……」

「……」

地を蹴り出し、二人は同時に駆け出した。

「いけ、ゼニガメ」

「迎え撃て、ヒトカゲ」

二人の指示を聞いたゼニガメとヒトカゲが、互いに牙を向きながら相対する。そして、二人は――

「……」

「……」

互いに睨み合っていた。

「……お主たち？　　ポケモンに指示を——」

「必要ない」

「……ええー」

あまりにももの全くの同時返答に、オーキドは返す言葉がなかった。

「この程度の敵を相手に、僕の指示を仰ぐ必要があるポケモンなら。

僕にはいらぬね」

「言うではないか衛宮切嗣。おまえの方こそ、足元を掬われないことだ」

「ご忠告をありがとう、言峰綺礼」

「もつとも、お前の敵が足元の存在ではなく。天上の存在かもしれんわけだが」

「……」

「……」

「殺す」

かくして、場外乱闘が始まった。——結果。

研究所が跡形もなく消え去った。



「……さて、行こうか」

最低限の荷物をビジネスバッグにまとめた切嗣は、ついにマサラタウンを出る。悲願を達成するために。

「……ポケモンチャンピオンになって——」

「僕は——」

「——メガガルーラを禁止にする」

## はじめてのジムバトル

2.

ポケモンバトル。それは文字通り、ポケモン同士の戦いだ。

トレーナーはポケモンに指示をし、ポケモンはトレーナーの指示通りに動き、ポケモン同士で競い合う。

審判からの指示により戦闘不能になれば敗北、相手のポケモンを戦闘不能にすれば勝利である。・・・さてこのポケモンバトルだが、楽にそして確実に相手から勝利を勝ち取るならば、一体どんな戦略を取るべきだろうか。

Levelを上げる？

否。それは基本的事項だ。

相手の戦力を分析し、戦略パターンを導き出す？

否。そんな事も出来ないものがポケモントレーナーを名乗ろうなど、烏滸がましいにもほどがある。

タイプ相性を突き詰める？

否。重要ではあるものの、そればかりにとらわれてしまつては、相手の奇策に絡め取られる。

否、否、否、否——否だ。

どれも違う。どれも違うんだ!!

そう切嗣は葛藤した。如何にして、自身が確実にポケモンチャンピオンになれるかを、切嗣は模索しまくつた。

そんな切嗣の苦悩を見て、言峰綺礼は嗤っていたのを切嗣はよく知っている。

言峰綺礼は誠実で真面目な好青年などと評価する大人たちを見て、切嗣は「そんなはずはない」と断じる。

閑話休題

そんな綺礼の歪な笑みを見て、イラつときた切嗣はすぐさま行動に移した。——イシツブテを投げつけたのだ。

イシツブテ合戦。それは、古来よりマサラタウンの民へと伝承され

続けた儀式とも呼べる儀礼。

マサラタウンの人間は、幼少の頃より重さは軽く二十キロを超えたイシツブテを軽々と片手で持ち上げ、相手に向かってボール感覚で投げつけるといふ、他の町の人間が見れば正気の沙汰とは思えないような所業を平然とやってのけるだけの戦闘能力を有しているのだ。

ゆえに、彼らはこう呼ばれる——マサラ人と。

切嗣が近くに転がっていたイシツブテを投げつける。それを綺礼は何事もなかったかのように躲す。

それを見た切嗣はまたもやイシツブテを今度は音を超えた速度で投げつける。それを綺礼は煩わしい蠅を振り落とす感覚でペチン、と叩き落とす。

それを見た切嗣はイシツブテを投げつけ空間に穴を開き、イシツブテに次元を超越させながら多方面から綺礼を蹴り殺しにするようにするも。綺礼はそれを全て叩き潰した。

かくして不適に、そして人を不愉快にさせるような笑みを浮かべる言峰綺礼と、親の仇を見るかのような形相をした衛宮切嗣の構図が出来る上がったのである。

「……なんなんだ、キミは」

「なんだ、とは。つれないことを言うな衛宮切嗣」  
「ちっ」

忌々しい奴め、と。切嗣は内心で毒づくも、それで何か解決するわけでもない。

——こうなったこいつは執拗に僕の嫌なことをしてくるからな……。

それも、ものすごく的確に。

例えるならばドミノがラスト一個で完成するぜ！  
と  
いったタイミングで全てを破壊されるあたりだろうか。

取り敢えず、「いまここでこれだけはするな」といったことを言峰綺礼はことごとく成してくるのだ。・・・嫌いにならないわけがない。

「……いつまでいるつもりだい？」

「それを言う、義務がわたしにあるのかね？」

「……僕が知りたいからだ」

「それは衛宮切嗣、お前の都合であり。私には一切、関係のない事だ」

「……」

「……」

——正論だけに腹が立つツ!!

歯を噛み締め、切嗣はどうこの場を切り抜けるか模索する。

先ほどまで思考していたポケモンバトルに関する必勝法の一切合切を捨て去り。切嗣は言峰<sup>宿敵</sup>綺礼をこの場から排除する方法を模索する。

——どうすれば、どうすればいいツ!?

ある意味。いや普通に、これはポケモンバトル必勝法より難易度は高いのではないのか？

そう思いながらも切嗣は諦めない。諦めなければ、必ず道は切り開ける。そんな根性理論を持ち出すほどにまで、切嗣は急いでいた。

そんな切嗣の内心を見透かしているのか、綺礼の口の端が少しだが釣り上がる。そしてそれを見た切嗣が額に青筋を立てるの堂々巡り。

水と油、犬と猫、北風と太陽、e t c e t c。衛宮切嗣と言峰綺礼とは元来そういうものなのだ。

この二人は決して相容れない。

——……面倒だ。さっさと消し去らなければ。

と、そう思い至った時だった。

「……ツ!!」

雷が落ちてきたかのような衝撃が、切嗣に降りかかる。

口を半開きにし、目を大きく見開く。そんな切嗣の異様な姿を見て訝しんでいた綺礼だったが、やがて「つまらないことになったな……」とだけ言い残し、彼は踵を返した。

「……は、はは」

そして残ったのが切嗣だけになったとき、彼は笑みをこぼす。

「そうか、そうだ、それが最善だ……!!」

彼の頭のなかで、次々とピースが当てはまっていく。

かくして、切嗣は必勝の方法というものを、編み出してしまった。

◆?◆?◆?

「試合、開始ッ!!」

ポケモンリーグの公認ジム。

ポケモントレーナーはそれらのジムを周り、ジムリーダーと呼ばれる存在に認められる事で得ることが出来るジムバッジを七つ集めることでポケモンリーグへと挑むことが出来るのだ。

そんなポケモンジムの一つに青年、衛宮切嗣はいた。

そして彼のあたまのなかには、既に対戦相手たるジムリーダーの情報が詰まっている。

——ジムリーダーの名前は、遠坂時臣。

心を殺し、感情を消し去り、彼は動きだす。

——優秀なポケモントレーナーで、伝統的なポケモントレーナーの家系に属している。

スイッチを切り替え、彼は必殺のポケモントレーナーへと至る。

——そして、ポケモントレーナーであることに誇りを持っている、か。

と、そこまで考えたところで。ジムリーダーの遠坂時臣から切嗣へと声がかけられた。

「まずは、ここまでよく辿り着いた。と言っておこう、挑戦者」

「……どうも」

「キミは確か、ポケモンジムの挑戦は初めてだったね」

「……」

「なればこそ、教えてあげよう。ポケモンジムの険しさ、厳しさを——」



「だぼっ!？」

遠坂時臣の顔面に、モンスターボールから飛び出たゼニガメが直撃した。

「……やはり、な」

そう言った切嗣の手には、光り輝くジムバッジがあった。  
彼の作戦はこうだ。

《ジムリーダーを直接狙う》

それも、ごくごく自然を装って。

例えばポケモンがモンスターボールから飛び出したところが相手の顎、とか。

切嗣はそれを、あの時のように空間の壁を破壊し、次元の異なる空間から攻撃することにより可能とした。

一度それにより、空間を司るポケモンなどという仰々しいポケモンとリアルファイトすることになった事など、これのためならば些細なことだった。

「……なっ。遠坂時臣がやられた!？」

「フン、ジムリーダーの恥さらしめ」

「おいおいウソだろ!？」

「んま、遠坂時臣はジムリーダーのなかでも最弱！  
かれば、ちよちよいのちよいつ、てね！」

俺にか

◆?◆?◆?

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトという、ジムリーダーがいる。  
彼はジムリーダーだけでなくトレーナーズスクールの講師も勤め  
ているという、極めて優秀な人間だ。

「……ふっ、来たか」

そんなケイネスは紅茶のカップをソーサーにおき、  
“テレパシー”  
にて送られてきた情報に笑みを浮かべた。

「衛宮切嗣」

それが彼の有する、ヤマブキジムへとノコノコやってきたチャレン  
ジャーの名前だ。

ニビジムのジムリーダー、遠坂時臣を僅か一分という異例の記録で  
打ち破ったポケモントレーナー。

実に、実に楽しみだとケイネスは嗤う。

「さあ、来るがいい衛宮切嗣。このケイネス・エルメロイ・アーチボ  
ルトが有する。ヤマブキジムのトラップを全て乗り超えて!!」



「……なんてめんどくさいジムだ」

そう切嗣が呟いた場所は、ヤマブキジムのなか——ではなく、ヤマブキシティにある巨大企業。シルフカンパニーのオフィスのなかである。

「カメラからの情報だけでも、百四十を超える罠に、一部が異界と化していて、毒タイプポケモンによる……頭が痛くなる」

正直、ケイネスはバカなのだろう。でなければこんな罠を張り巡らせるわけがない。まともな感性をしたトレーナーではないのだろうと切嗣はまとめる。

「……これを馬鹿正直に攻略しようとするトレーナーがいることにも驚くが」

まあいい、と切嗣はほくそ笑む。

自分がそんなめんどくさいことをするわけではないのだから。

『号外!!』

ヤマブキジムが爆発！ それに伴い、ジムバッジの叩き売り！

さらに、ジムの職員であるランサーが死亡、こ

の人でなし！』

「……フツ」

計画通り。そう呟いて、衛宮切嗣はヤマブキシティを後にした。

## チャンピオンリーグ

3.

メガガルーラ。そのポケモンを、衛宮切嗣は決して許さない。彼もかつては、ポケモンチャンピオンという存在そのものに憧れを抱いていた。

ただただ純粹に、ポケモンチャンピオンになりたいと。子供が正義の味方に憧れるのと同じように夢見ていたのだ。

・・・だが、いつの日だったか。それは突然訪れた。

いつものように、彼はテレビの前で生中継のチャンピオン戦を観戦していた。

そのチャンピオンの名前はワタル。ドラゴンポケモン使いのトレーナーだ。彼はそのトレーナーが、他の子供たち同様に好きだった。

ドラゴンはカッコいい！                      そんな感じの理由である。

そして、今日もまたチャンピオンのワタルが相手のトレーナーを華麗に倒すのだろう。そう思いながら、切嗣は画面を覗いていたのだが。

『試合終了！                      勝者は——』

画面に映ったのはいつものチャンピオンの勝利ではなく。

無名のポケモントレーナーによる、所詮下克上だった。

それを切嗣は、半ば呆然と眺めていた。

圧倒的、そういう他ない試合だった。切嗣も言葉だけは聞いたことのある『メガ進化』を巧みに使い。その無名のトレーナーはワタルに勝利した。

それをどこか「嘘だ」と思いながら画面を眺めていた切嗣を。切嗣

の隣で同じく試合を観ていた少女——シャーレイが苦笑しながら宥めていた。

彼の二つ目の転機は、そのシャーレイが関係する。

切嗣の父親たる衛宮矩賢は優秀なポケモントレーナーで、オーキド博士ほどではないにしろ優秀なポケモン研究家だった。

シャーレイはそんな矩賢の弟子のようなものであり、ある日矩賢の机に置いてあった物を見つけてしまう。

「これは……」

メガ石、そしてガルーラの入ったモンスターボール。

これは矩賢があの日ポケモンリーグの試合を見た後、即時取り寄せたものだった。

シャーレイは将来有望とされるポケモントレーナーである。

そんな彼女はあの日試合を切嗣以上によく覚えている。

「……」

そつと、それに手を触れるそして——。

「シャーレイッ!!」

「ケリィ……!!」

切嗣の目の前にある光景は、この世のものとは思えないほどの地獄だった。

「——来ちゃだめ!!」

シャーレイが泣き叫びながら、切嗣をその光景から遠ざけようとする

る。

それは、そうだろう。切嗣にとって、この光景はあまりにも酷だ。それをなによりも理解しているのは他でもない、この光景を作り出したシャーレイ自身だった。

「そんな、そんな……っ!!」

切嗣は「あり得ない」と思いながら、現実から目を背けながらも、誰よりも『これは現実だ』と理解していた。

「ガアアアアアッ!!」

一体の巨大な体躯をしたポケモンが、相手のポケモンを吹き飛ばす。

シャーレイのポケモン——メガガルーラは大木を思わせる腕を振りかぶり、その剛腕を持って竜巻を起こして相手のポケモンを蹂躪していく。

・・・それだけなら、まだ良かったかもしれない。

メガガルーラの背中から、一つの小柄な影が飛び出した。

「あれは——」

切嗣はそれを見て目を見開きながら、その正体を理解する。

「——子ガル」

普段、ガルーラのお腹のポケットのなかにいるガルーラ子供だった。

だが、その体は普段のそれよりは大きく、瞳はどこか好戦的な感情を宿していた。

「がるああああ!」

子ガルが、動く。相手のガードの隙間を縫い、チマチマとそれは攻撃して行く。

——だが、侮るなかれ。子ガルの攻撃はガルーラ本体の半分ものダメージを与えるほどの代物である。

さらにそれだけではなく、「怯み」と呼ばれる追加効果はガルーラ本体と同じ判定という鬼畜しようのものだ。

「あ、ああ……」

——気合のタスキ?

そんなもので耐えたって、子ガルが止めを刺せばいいじゃない。

「ああ……っ！」

——物理受け？

受け出しするならすればいい。だが、その交換先は一度凌いだところで、次の攻撃にも耐え切れるかな？

「こんな……っ！」

——スカーフで上から叩く？

たわけ。その程度で沈むような、柔な耐久などしていない。

「こんな、ことが……ッ!!」

——ふはははは！

エアームド！

貴様ならガルーラ

から有効打点はくらうまい!!

大文字乙。

小物が小細工を仕掛けようとも、メガガルーラはそれらを真つ正面から全て粉碎する。

地を砕き、滝を割り、伝説のポケモンときえも渡り合うポケモンそれが——。

「メガ、ガルーラ……ッ!!」

それからというもの、切嗣はいくつものメガガルーラによる蹂躪を見してきた。

そこで彼は知る。

メガガルーラが、最早頂点なのだということに。

「……どうすればいい」

そして、悩む。このままでは、メガガルーラはどの大会でもその力を遺憾無く発揮してしまう。

「メガガルーラが一体、その一体を斃すのに必要なポケモンが最低でも二体……。これじゃあ、天秤の針があべこべだ……ッ!!」

メガガルーラを倒せるのは、メガガルーラだけだなどという馬鹿げた状況が発生してしまう。

「そんなことは、断じて許されない……!!」

そして、ふと気づく。

「許されるべきじゃ——」

“一番始めに、メガガルーラを流行させたのは、誰だっけ？”  
「……」

こうして。切嗣の野望は決まった。

メガガルーラを完膚無きまでに叩き潰してチャンピオンを斃し、『メガガルーラなんて大したことなかったんだ』と思わせることだ。

——そして、その時は訪れた。

「……長かった」

いままで溜めてきたものを全て吐き出すかのように、切嗣はそう呟いた。

そこに込められていた感情がなにか、それは切嗣にしかわからな  
い。

だが、これだけは言えるだろう。

「……今日をもって、メガガルーラは根絶する」

……まあ、その数を減らすが限度だろうが。それでも、メガガルーラ  
の数は減るだろう。

切嗣が用意したのは、ありとあらゆるメガガルーラを無効に出来る  
だけのポケモンたちだ。

例えば物理一辺倒のメガガルーラが相手ならエアームドを。

無駄に居座りたがるメガガルーラにはメガゲンガーを。

大文字を兼ね備えているのならバシャーモを——と、いった感じで。彼はありとあらゆるメガガルーラを殺し尽くすだけのポケモンを用意したのだ。

「……いこう」

そして、彼は戦闘フィールドに立つ。

かつて憧れていたステージに立ったというのに、そこにあるのはただ『メガガルーラまじぶつ殺す』という感情のみ。

感動など不要な感情として捨て去りそして、対戦相手たるチャンピオンが現れ——

「なっ!?!」

そこで始めて、衛宮切嗣が顔に貼り付けていたポーカーフェイスが崩れ去る。

出てきたのはあの日から玉座に座り続けていたチャンピオン、ではなく。

「言峰、綺礼……ッ!?!」

「久しぶりだな、衛宮切嗣。おまえと会わなくなってから、随分と経つ」

——バカな。僕が四天王に挑戦した時は、まだあの男がチャンピオンだったというのに!?!

「残念ながら衛宮切嗣。それには一分と二十三秒ほど遅かった。その間に私があの男を倒し、僭越ながらチャンピオンの座へと着くことになったのだよ」

「ッ!?!」

——くそ、これじゃあ計画が……ッ!!

潰える。そう結論し、絶望に打ちひしがれそうになった切嗣だったが。

「何をしている、衛宮切嗣」

「なっ——」

「早くしろ。あるいはその願い、叶うかもしれんぞ?」

素晴らしい、綺礼はモンスターボールを放る。呆然としながら、その

軌道を眺めていた切嗣だったが。

そこから出てきたポケモンを見て、彼の瞳に光が宿った。

「ガルー、ラ……ッ!!」

「フツ。さあ来い、衛宮切嗣!!」

私とおまえの、最後の戦いとい

こうではないかッ!!」

その綺礼の言葉が終わると同時に、切嗣はモンスターボールを投げた。

カチツと言う音が鳴り、モンスターボールの中からポケモンが出てくる。そして――

「エアームド――」

「ガルーラ――」

『ガルーラ、戦闘不能!!』

「やった……っ!」

切嗣はなんとか、メガガルーラをエアームド一体で倒し切った。

これを思えば、岩雪崩で怯みをひくたびに「ふざけるな、ふざける

なッ!!」 馬鹿野郎オ!!」などと号泣しながら叫び、審判や観

客及び視聴者に引かれたりしたことなど些細なことだろう。

「これで、世界は救われる……ッ!!」

大袈裟すぎる、などと言っではいけない。

切嗣にとつてらこれは快挙なのだ。ゆえに、彼は手放しで喜んだ。……喜んで、しまった。

それが、その行為が。彼の相対している言峰綺礼にとつてかっこうの餌でしかないことを忘れて。



「――征け、ガルーラ」  
「――は？」

まさかの二体目のガルーラの登場に、切嗣の頭は完全にフリーズする。

「やれ、ガルーラ」

「え、ちよ、は、え？」

『エアームド、戦闘不能ツ!!』

ドツ、と鳴り響く歓声のなか。切嗣は半ば発狂しながら、綺礼にむかつて叫ぶ。

「メガガルーラが二体、なんだこの悪夢みたいな冗談はツ!!」

「なんだもなにも。見ての通り、としか言いようがないが」

「ふざけるなツ!」

メガ進化を二体使用出来たのはおいておいて、なんで同じポケモンを二体も登録出来てる!？」

ポケモンリーグ協会により定められた、レギュレーションというものがあある。

これはポケモンバトルの公式戦において守らなければならないルールであり、これを破れば問答無用で退場とされるものだ。

そして、言峰綺礼はそのレギュレーションにより記されているルールのひとつ『同じポケモンを二体以上使用してはならない』を破った。

——なのに。

「観客はおろか、審判までもがキミにジャツジを下ささない」

それは、おかしいことだ。

目の前でルールを堂々と破っている男を、審判は放置している。つまりこれは——

「なにをした、言峰綺礼……ッ!!」

——八百長試合だ。

「ふむ」

「……」

「知っているかね、衛宮切嗣」

「……なに?」

「ポケモンチャンピオンへと至ったものに許される。特権というものを」

「特権、だど?」

そんなものは知らない、と。切嗣は視線を険しくして綺礼に返す。そんな切嗣に綺礼は然りと頷いた。

「知らないのも無理はない。私も、チャンピオンになってから知ったのだからな」

「……」

「チャンピオンの特権。それは、レギュレーションの変更を可能にする、だ」

「なんだっ、て!？」

バカな!

そんな事をすれば、ポケモ

ン界は混乱の渦になる!!」

「だろうな。だが、チャンピオンとは常に他の有象無象の一步先を行かねばならないとは、思わないかね?」

「それは——」

「ならば、問題あるまい。そのような混乱を生まぬためにも、チャンピオンとはその座を死守せねばならんだ」

「……」

「最も。レギュレーションの変更などという馬鹿げたことをしたのは、私が初めてだったみたいだが」

話は終わりだ、とばかりに綺礼が切嗣に次のポケモンを出すように促した。

『ポリゴン2、戦闘不能ッ!!』

そこから先は一方的だった。

切嗣がいままで何回も見てきた、メガガルーラによる圧倒的な蹂躪を、焼き返したかのように何度も繰り返された。

衛宮切嗣は、あらゆるメガガルーラに対応出来るポケモンを揃えた。

だが言峰綺礼はその一步先に行く。

ありとあらゆるメガガルーラに対応出来るポケモンを嬲り殺しにするメガガルーラを揃えていたのだ。

——こんなものは、断じてポケモンバトルじゃない!!

『衛宮切嗣のポケモンは六体すべて戦闘不能、よって勝者は——』

切嗣は激怒した。必ずかのメガガルーラの暴行を阻止せねばならぬと決意した。

『ちよ、切嗣選手!?!』

切嗣にはポケモンを戦わせる理由がわからぬ。

「僕は——」

切嗣はマサラ人である。いままで数多くのイシツブテを投げつけてきた。

「メガガルーラを——」

だから肉弾戦には、人一倍自信があつた。

「——許さないッ!!」

『ガルーラ、戦闘不能ッ!!』

静まり返る会場。

当然である。なにせ衛宮切嗣がメガガルーラを場外にまで吹き飛ばしたのだから。

それも、ただのグーパンチで。

「はあ……はあ……」

「……くくく」

そんな静まり返った会場のなか、くぐもって笑う男が一人。

「いい、いいぞ。衛宮切嗣ッ!」

その男の名は言峰綺礼。

彼はここに来て大きく感情を露わにした。

「それでこそ、マサラ人というものだ!!」

自身のモンスターボールの開閉スイッチを全て、彼は押し潰す。――誰にも、邪魔されないために。

「マサラ人の本懐とは、ポケモンバトルにおいて己の肉体を使用すること……」

ブチブチッと。音を立てて綺礼の服のボタンが弾け飛ぶ。その弾け飛んだボタンが審判の額に直撃し、審判の体が真後ろにマツハ3の速度で吹き飛んだ。

「言峰綺礼ツ!!」

「衛宮切嗣ツ!!」

途端。二人の体が消える。

先ほどまで彼らがいた場所は陥没し、会場の照明器具が一斉に割れる。

風が吹き荒れ、地面がひしゃげる。二人がぶつかれば天蓋は吹き飛び、そのまま飛び出せば天候が荒れ出す。

宇宙空間へと移動する際に、オゾン層で優雅していたレックウザが地に落ち。ロケット団の基地のなかで彼らの戦闘を念写で見ってしまったミュウツーが、無言でハナダの洞窟へと避難した。

天候、ポケモンの生態、トレーナーの常識。それらを全てひっくり返すほどの戦闘を、彼らはその後三日三晩繰り広げる。

森羅万象を打ち砕く存在、それこそ――マサラ人だ。

結論から言うとメガガルーラを使うトレーナーはいなくなった。そんなものより、人間の力の限界を見てみたいと名乗りを上げる『修

『羅』が続出したのだ。

だが、そんな世界になつてなお、いやだからこそマサラ人はその真価を發揮した。

烈怒と紅麟レッドグリリン、懽瑠宇フールと言う。後に衛宮切嗣と言峰綺礼以来の逸材と呼ばれるマサラ人までもが誕生することになる。

こんな世の中になつたことに、現チャンピオンである衛宮切嗣はこう語る。

「子供の頃、僕はポケモンチャンピオンになりたかつた」と。やけに遠い目をしながら。